社会学理論学会大会　テーマセッション
「〈ポストヒューマン〉と人間論」

フェミニズムの「人間」批判は どこへ行きついたのか

――「ポストヒューマン」という新たな主体の社会学理論的可能性について――

武蔵大学・日本女子大学・関東学院大学・成蹊大学非常勤講師
高橋 幸（TAKAHASHI Yuki）
ytakahashi0505@gmail.com

【概要】フェミニズムにおける人間（man）批判の流れと発展

第一波フェミニズムによる「人間」批判
女性にも男性と同等の権利を！
第二波フェミニズムによる「人間」批判
「男性主体」を標準とした社会制度になっており、女性排除的だ！

↓

フーコーらポスト構造主義思想によって、
人文主義的な理想としての「人間」の限界が指摘され、
「人間の死」が宣言される

↓

「人間」概念を拡張しながら使い続ける派：ヌスバウム、ベンハビブ＆フレイザー（批判理論）

「人間」や「主体」を乗り越えようとするポストモダンフェミニズム理論：バトラー

↓

フェミニズムにおける「新しい主体」の構想としてのポストヒューマン論：ハラウェイ、ブライドッティ

【概要】用語の確認：新しい唯物論的フェミニズム（new/neo material feminism）

近年、**マテリアルターン**（material turn）や実在論的転回（ontological turn） が起こっている（新しい実在論、新しい経験主義、object oriented ontology, agential realism(バラッド)……）

フェミニズムの領域ではとくに「新しい唯物論」：大きく二つの潮流からなる

【1】ポストモダンフェミニズム系

1980年代　「**セックス／ジェンダー**」の区別を重視する**社会構築主義的アプローチ**に基づくジェンダー論、フェミニズム研究

↓

1990年代　ポスト構造主義の影響を受けたバトラー、ハラウェイらが「**セックス（自然）／ジェンダー（文化）」二元論を批判し脱構築**

・**バトラー**は「セックスもまたジェンダー（文化的構築物）だ」とし、**言語一元論**に陥っている、「身体」がないとして批判されがち（実際にはそうではないが）

・20世紀前半からの霊長類学類、生理学をフェミニストパースペクティブで分析し、自然／文化の脱構築を行った**ハラウェイ**は、早い段階でマテリアルに着目した論者として「新しい唯物論フェミニズム」において評価されているという状況。

【2】フェミニズム科学論・メディア論

スタンドポイントセオリー以後のフェミニズム科学論、生物学や物理学のマテリアルに関する知見を踏まえた「主体」論（宇宙物理学のカレン・バラッド、哲学者のエリザベス・グロス……など）

【概要】用語の確認：新しい唯物論的フェミニズム（new/neo material feminism）

【＋α】身体論系

女性の身体経験（妊娠・出産など）を重視するフェミニズムの系譜が「身体の復権」を主張しながら新しい唯物論的フェミニズムに合流。

・人種、障害、外見、LGBTQなどをテーマとする幅広い研究が、新しい唯物論のキーワードの下にゆるく集結。

●「**マテリアル**」とは、大きく**(1)身体・肉体**、**(2)社会的制度**の２つの意味。

●本報告者は、**社会構築主義の知見を失わない新しい唯物論**の可能性を模索することが重要だと考えており、ここではとくに【1】の動向を検討する。

●本報告では、フェミニズム理論におけるマテリアルターンの動向によって、**フェミニズムの「主体」はどのようなものとして構想されえるのか**、新しい主体によって担われる**フェミニズムにおいて「自由」はどう構想されうるのかを、消極的自由／積極的自由**に分けて考えていく。

＊高橋の最終的な問題関心は、フェミニズムに関わる具体例とフェミニズム理論を見ながら、**社会構築主義以後の社会学理論（とくに主体をめぐる社会学理論）はどのように進化するのか**？を考えることにあるが、本報告は、新しい唯物論が志向する「主体」に基づくとフェミニズムが目指す「自由」はどのように変わってくるのか、その方向性を展望する。

目次

１. はじめに
1.1. 本報告の概要
1.2. 問いの背景、問い、分析対象、議論の射程
2. 分析　主体の理論の展開
2.1. フーコーの人間学批判
2.2. バトラーの「主体（agency）」の消失
2.3. バトラーの「パフォーマティブな主体」論に対する他のフェミニストからの批判
2.4. ハラウェイによる「媒介主体（agency）」論
3. 考察　「媒介主体」の理論的意義
3.1. 第二波フェミニズムの運動戦略
3.2. 媒介主体によるフェミニズムと「自由」
3.3.フェミニズムが目指す「自由」はどう変わるのか
（おまけ）3.4. 媒介主体によるフェミニズムの運動主体の特徴
4. 結論

1. はじめに

【問い】

・フェミニズムの「人間（man）」批判は、どこへ行きついたのか。

・とくに、**「人間の死」（フーコー）の系譜上にあるポストヒューマン論**において**「主体」はどのようなものとして構想**されているのか。

・フェミニズム運動の「主体」という理論上の概念を必要とするフェミニズムにおいて、主体のマテリアルに着目した新しい主体論（**ハラウェイの「媒介主体（agency）」というあり方**）とは、どのようなものか。

【分析対象】

ジュディス・バトラーの主体論、ダナ・ハラウェイの主体論を、新しい唯物論フェミニズムの旗手ロージ・ブライドッティの分析を踏まえつつ、分析する。

【議論の射程】

●フェミニズム理論における「新しい主体」をめぐる議論をふまえ、フェミニズムはどこへ向かうのか？を、**とくに自由概念がどのように組み替えられるのか（フェミニズムは「自由」をどのようなものとして構想していくのか**）という切り口で考えていく。

●これまで構築されてきた社会構築主義的な社会学理論がどう組み変わっていく可能性があるのかを見通す。

2.1. フーコーの人間学批判

フーコーは『言葉と物』（1966＝1974）において、エピステーメー（各時代の認識論のこと）を3つに区別（Foucault 1966＝1974: 20）

・**中世とルネッサンスの時代**（ 16世紀から17世紀半ばまで）／**古典主義時代**（17世紀中盤から19世紀初頭まで)／**モデルニテ**（近代性modernité，19世紀初頭から現在まで）

モデルニテのエピステーメーにおいて、「《人間（*homme*）》」が成立。

・ 超越論的な認識主体であり、同時に「肉体を持ち（生命）、勤勉で（労働）、話す（言語）という」有限な存在としての、経験的＝超越論的な人間(ibid. 338)

「人間」を研究する「人文諸科学 humanities 」はこのエピステーメーの中で成立したもの
しかし、人文主義（humanities）的な「人間」概念は限界を迎えている、というのがフーコーの議論。

・フーコーは『言葉と物』（1966）でニーチェの「神の死」にならって**「人間の死」「人間の終焉」を主張**（Foucault 1966＝1974:363）。

・背景には、**伝統的な歴史哲学に対する**批判、とくに**歴史哲学におけるヒューマニズム（人間中心主義）**批判 （withアナール学派）がある。レヴィストロースの文化の構造、精神分析、ソシュールの言語学などの文化的構造こそが歴史を作っているのであり、「人間」ではないというのがフーコーの考え。

・1971年論文の後、考古学（エピステーメーの学）から系譜学へと移行し、**権力論**を展開

2.2. バトラーにおける「主体」の消失

バトラーは、『ジェンダー・トラブル』（[1990]1999=1999:20）において、**主体（subject）は権力によって構成(生産)されるもの**だというフーコーの権力論を受け継ぐ立場をとる。

・**主体はパフォーマティブに、行為**（action, performance）によって**構築**されるものであり
行為の前に「主体」や「アイデンティティ」という実体的統一体を想定することを批判
（[1990]1999:33＝1999:58-59）

バトラーは「行為者（agency）」をどのようなものとして論じているのか

●agency概念そのものを無効とするものではないが、**既存のagencyという考え方（前提）**を批判。

●**撹乱する行為**をする**主体なるものの存在**は認めているが、**積極的には論じることができていない。**

・「**行為体（agency）」は、その反復の一つの変種の可能性**として位置づけられるべきである。もしも意味づけを取り仕切っている規則が、オルタナティブな文化の理解可能性の領域――つまり階層的な二分法の厳格な法則に異を唱えるような新しいジェンダーの可能性――を制限するだけでなく、可能にするものでもあるなら、アイデンティティの撹乱が可能になるのは、このような反復的な意味づけの実践の内部でしかありえない。」（ibid. 255）

＊フェミニズム運動を進める上で重要になってくるのは、バトラーが可能性を見出している権力**「撹乱的な（subersive）行為」が可能になる条件とは何なのか**？どうすれば、既存の意味の規則（パターン）を撹乱できるのか？「撹乱するポテンシャル（潜在力・可能性）を持つ状況やそこに置かれた主体／そうでない位置や主体」があるのではないか？）などだが、**それに関してバトラーは積極的には論じていない。**

2.3. バトラーの「パフォーマティブな主体」論に対する他のフェミニストからの批判

『ジェンダー・トラブル』（[1990]1999）に対するフェミニストの反応。

（１）「普遍的な主体」という理念に基づいてグローバル規模での公共善の確立を目指すリベラリズムの哲学者マーサ・**ヌスバウム**（1991）は、「ジェンダーのパフォーマティビティというアイディアは**フェミニズムの政治には役に立たない**」と批判。（「普遍的主体」を形而上学的実体であるとして脱構築しようとするバトラーの立場をほとんど理解しない立場。）

（２）政治学者のセイラ・**ベンハビブ**は、**「主体」概念を失うことについての懸念を表明**し、バトラーの「行為者なき行為……によるジェンダー化されたアイデンティティの構成という見方は、フェミニストのポリティクスや理論の規範的なヴィジョンを切り崩してしまう」（1995: 215）、「ポストモダンは女性運動を古くさいものとみなす視点ももたらした」と批判。**パフォーマティビティモデルに代わる「物語モデル」を提起**。ますます「断片化」し「分裂」していく主体を、物語を通して紡ぎだす能力として主体性を擁護。ますます断片化していく物質的・文化的世界で首尾一貫性を追求することや、錯綜する人生の物語から意味を生成しようとする試みは、誤りでも、不正でも、無意味でもないと主張。

2.3. バトラーの「パフォーマティブな主体」論に対する他のフェミニストからの批判

（３）フランクフルト学派の批判理論を受け継ぐフェミニスト、ナンシー・**フレイザー**（[1991]1994）は、

・「弱い脱構築／強い脱構築」の区別を用いつつ、

・フェミニズムにおいては「文化的アイデンティティの承認」と「物質的な再分配」の双方をめぐる闘争を同時に進めていくことが重要と主張。

（小宮2009, コーネル[1991]1994については割愛）

→バトラーが他のフェミニストによって批判された点は、
言語一元論や「身体」の消去という点よりも、**より根本的には「主体（subject, agency）」をポジティブな概念として立てることを批判した点だった**ということがわかる。

2.4. ハラウェイの「媒介主体（agency）」

バトラーによる「主体」の脱構築の立場を共有しながら、バトラーを越えて、新しい主体（agency）のあり方について、もう一歩踏み込んで具体的に論じた思想家として**ダナ・ハラウェイ**（1991=[2000]2017）

●**「主体」の脱構築による「主体」を失うことへの懸念**

「**黒人女性作家が自らの名前で本を書き始めた時期に、「作者の死」を宣言すること**は、黒人女性作家が白人男性作家と同等の権限と権利をもって物を書き、意見を主張することを阻害するものになる」（Haraway 1991=[2000]2017:280）

●フェミニズムとは、**新たな多様な主体の出現**をサポートしていくもの、そのような思想的営為のことフェミニズムとは、「**現出しつつある社会的主体の数々**——差異化を行い、自らを自らとして表現し、矛盾に満ちていて、行為、知、信念に対して様々な主張を行う社会的主体の数々——**を肯定的かつ批判的に考慮に入れてゆく必要がある**。」（ibid. 280）。

「トランスフォーマティブな社会変化と関与していくこと、すなわち、ジェンダーをめぐるフェミニズム理論の数々をはじめとする、マスターフルな主体のあり様の解体を扱った、現出しつつある言説の数々に埋め込まれた希望というモメントに、そして、**場ちがいではあるものの領有されることもない種々の他者の出現に関与していく**」ことが、フェミニズム理論である（ibid. 280-281）。

2.4. ハラウェイの「媒介主体（agency）」

「**融合**」**による新たな主体のあり方**を提起。ハラウェイのいう新しい主体の特徴を主体の社会学理論の更新のためにまとめると、次のようになる。

（**1**）「媒介主体（agency）」の「**融合**」性。何かと何かを媒介するノード（結び目）として主体が表れる。それは、首尾一貫した合理性や確固たる輪郭を持たず、媒介物の一方が変われば「媒介主体」自体も変わる。内部に複数の存在を抱え込む、不均質な存在。

・媒介主体は、「主人たる主体」としても「疎外された主体」としても存在しえない。

・媒介（融合）とは、サイボーグにおいて、生体の部分と機械の部分は、どちらかがどちらかを包摂したり支配したりしない。互いに、互いのエンパワーメントを引き出す。

（**2**）媒介主体が持つ「知」はつねに「**状況に置かれた知**」（部分的で、具現化された主体）であるが、媒介主体は「**説明責任をまっとうできる**」。

・部分的で、制限された知：「状況に置かれた知は、人種や性といった刻印されたカテゴリー——男性中心主義的で人種主義的な植民地支配の様々な歴史の過程で旺盛に生産されてきたカテゴリー——の内部に書き込まれてきた人々が意識をマッピングするうえで、各段の力を発揮するツールである。」（ibid. 111=213）

・「**状況に置かれた知にはアカウンタビリティが折り込み済みである。**つかみどころのない中間的な空間という状況に置かれていることが、アクターたち——意識のあり方の見取り図のような枝分かれした灌木によって描出されうるかもしれないような世界を持つアクターたち——の特徴である。」（Haraway 1991:111＝[2000]2017:213）

3. 「媒介主体」の理論的意義の考察
3.1. 第二波フェミニズムの運動戦略

第二波フェミニズム運動は、**平等化戦略（男並みを要求）**と**差異化戦略（「女」という集合体の威信の向上や女固有の価値の強調）**の双方を同時に進めるという戦略をとってきた。

・ナンシー・フレイザーの「再分配／承認」もフェミニズムの大きな戦略に基づいたものであり、両戦略のジレンマを指摘したもの。

・「家父長制」「男社会」「ジェンダーペイギャップ」 を批判し、「女であること」に由来する社会的束縛からの解放（女性解放）を第二波フェミニズム運動は目指してきた。

女性解放（＝消極的自由の獲得）によって、女性の自律性（＝積極的自由）が達成されるという論理になっている。

平等化戦略（再分配をめぐる闘争）
女であることからの自由
＝消極的自由の獲得

差異化戦略（承認をめぐる闘争）
女であることへの自由
＝積極的自由の獲得？

・第二波フェミニズム運動においては、運動の主要目標としての消極的自由の獲得が語られることが多く、積極的自由についてはあまり語られてこなかった。

3.2. 媒介主体によるフェミニズムと「自由」

平等化戦略が依拠していた**消極的自由**の発想の根底には、**身体（マテリアルなもの）からの自由**がある。「マテリアルなもの」のなかにジェンダーも含まれていたことは否定できない（第二波フェミニズム期のラディフェミやマルフェミ、フェミニズムＳＦの論調を参照せよ、「女の身体」や「セクシュアリティ」からの解放をユートピアとしていた側面がある）。

●**ハラウェイとともに**：媒介主体は、**身体を通した自由**という側面に目を向けるもの。そのときジェンダーも含めた身体の多様性（既存の二元論の攪乱）を思考することがフェミニズムの特徴。

●**ハラウェイを越えて**：媒介主体は、「**他**」との融合やつながり（そのつながりがなくなれば、「自己」もなくなるというようなものであったりもするのだが）によって成り立つハイブリッドな存在として「自己」を認識するもの。これを社会学理論上整理する場合、**「<u>他との融合やつながり</u>」と「<u>束縛</u>」は、どう違うのか？** 融合の場合には、支配／被支配関係にならないのだとすれば、「ならない」ための具体的条件とは？

・ハラウェイにおいては、他と融合することで**互いに**「**新しい可能性**」を引き出せる点で「束縛」とは違うと考えられている（ただし脆弱さの共有という側面もあるような……）。

→今後、**<u>「互いが互いの可能性を引き出すようなエンパワーメントされるつながり」と「束縛」の違いを見極められるような基準や理論が必要</u>**だという論点を導出できる。

・この議論は、「脱埋め込み化から再埋め込み化へ」（ギデンズ）という議論における「よい再埋め込み」とは何か？（親密な関係性論、ソーシャルキャピタル論）を考えるさいに示唆的。

3.2. 媒介主体によるフェミニズムと「自由」

積極的自由とは**自律性の獲得のことであり、「自分自身になる」こと（＝自己実現）のこと。**具体的には、ある行為がその人格（Persönlichkeit）のみを原因としており、人格全体を表現するようなものであるとき、それが自由と言われる（愛に基づく行為や芸術的活動等（「愛」に基づくオタク的消費活動もここに含まれると高橋は考えている）がそれに相当）（高橋 2019）。

・**積極的自由**という発想の根底には**性別のない「人間」や「自己」という想定**があった。フェミニズム運動において「積極的自由」があまり語られてこなかったのも事実……。

（・フェミニズムの**差異化戦略**は**「女であることへの自由」、「女性役割（妻、母）を通した自己実現」**を求めるものであったが、フェミニズム運動全体においてそのようなあり方が支持され推し進められてきたとは言いえない。運動内部でも、それは「女性」という地位を固定化するものであり、保守運動と共振するものとして警戒されてきた。）

●「媒介主体」によって気づかされるのは、フェミニズム自身が「積極的自由」を考えるときには、**ジェンダーを削ぎ落した抽象的理念としての「人間」を、暗黙のうちに想定して議論してきたということ！**

→人間批判をして、新しい唯物論に行きついたフェミニズムは「人間」概念の再考だけでなく、「自由」概念の再考を迫るものとなる可能性がある。

3.3. 「媒介主体」という考え方によって フェミニズムが目指す「自由」はどう変わるのか

媒介主体における**（積極的）自由**とは、どのようなものとして考えられるのか？

●**「人格」や「自己」の輪郭が不明瞭だがアカウンタブルな「媒介主体」**は、**自律性**や**自己実現**とは異なる自由を思い描くのか？　それとも、**融合的だが「自己」や「人格」として指し示すことのできるようななにかしらの「統一的なもの」**（それは作動的自己のように、その時々によって変わるものであるとしても）**を保持することによる「自律性」や「自己実現」としての自由というあり方を保ち続けるのか**？

（・**融合**しているような他なるものとの間に、「愛」という関係が成り立つのか？ ハイブリッドな媒介主体においては、既存の「ロマンティックラブ」という意味での愛とは異なる親密な関係性があると考えるべきか？（具体的には、親密な関係性を成り立たせる「愛」の変化（ロマンティックラブからコンフルエントラブ（互いの**コミットメント**の重視）へ）の議論にどのような示唆を与えるのか）。融合／切断）

●**まとめると、**

・媒介主体によって、フェミニズムは、性別による社会的束縛からの自由（＝消極的自由）を目指すだけでなく、**身体を通した自由**という側面にも目を向けるものとなる。そのときジェンダーも含めた身体の多様性（既存の二元論の攪乱）を思考することがフェミニズムの特徴。

・ハラウェイの媒介主体に見られる、「人間（man）」批判後のフェミニズムは、**「女であること」を「マテリアルな特徴の一つ」として捉え、他のマテリアルな特徴と並列的に捉えた上で捉えていくものであり、マテリアルなレベルを削ぎ落さない「自由」な主体のあり方や自由の構想をしようとするものである**と位置づけて、主体をめぐる社会学理論の構想のために用いることができる。

＊注釈：ハラウェイ自身は、80年代に書いた「サイボーグ」論などにおいて、サイボーグの「性」の無さ、性の攪乱性に可能性を見ようとしていることは事実だが。

（【おまけ】3.4. 媒介主体によるフェミニズムの運動主体の特徴）

融合的な主体が**アフィニティに基づいて連帯する**というあり方（ハラウェイ）によって、**運動主体モデル**は次のようなものとして構想されることになる。

●個人主体のジェンダーや性指向、エスニシティ等の属性（つまり「誰であるか」）に基づく連帯ではなく、何とつながっており、どのような「状況」に置かれているのかの影響を強く受けた主体によって、緩やかにつながって形成される運動主体。

・**マルチチュード的な運動体**はＳＮＳ、 ハッシュタグ運動によってより現実的なものになってきている。

・ネグリ＆ハートのマルチチュードよりも、**個々の主体自身のハイブリッド性**を強調するものであるという点がハラウェイの媒介主体の特徴。

・したがって、協力者の権力性やパターナリズムとして障害者運動などで告発され、リベラリズムが検討してきた「**当事者／アライ（ally）」の二分法を緩めていく**可能性がある。（「当事者」との**つながりの程度差で当事者性**が測定されることになる）

・このような運動主体のモデル化によって、前半で述べたバトラーに対する疑問は解消する。**何と融合しているのか（何の影響を受けやすい場にいるのか）**によって、**攪乱する主体でありやすさ／ありにくさの程度の違い**が発生していると説明することができる。

4．結論

●（バトラーと同様に）「人間」批判と「ジェンダー（文化）／セックス（自然）」二元論の脱構築の立場をとるハラウェイは、「媒介主体」という新しい主体のあり方を構想している。それは、**融合的な主体**であり、**状況に置かれた知に基づいた説明責任**を持つ主体である。

●媒介主体という主体のあり方に基づくフェミニズムは、**性別による社会的束縛からの自由（＝消極的自由）**を目指すだけでなく、**身体を通した自由**を考えるものである。

●媒介主体というあり方によって、暗黙のうちに想定されてきた理念としての「人間」だけでなく、「自由」（人格全体の表現や「自己」になること、自己実現）という考え方や理念が組み替えられていく可能性がある。

●フェミニズムの人間（man）批判は、新しい唯物論に行きつく中で、ジェンダーやセクシュアリティを削ぎ落した（＝解放された）「純粋な個人」が「自己になる（自己実現）、自律性を獲得する」という「自由（積極的自由）」の考え方を変えていく可能性がある。**媒介主体**における「**自律性**」や「**自己実現**」はどのようなものとして成り立ちうるのかという点は、「媒介主体における**アカウンタビリティ**」とともに、今後さらに考察されていく必要がある。

●物質的・身体的なものからの解放を含む解放の自由としてのみではない「自由」のあり方をどう構想していくのかという論点は、身体への考察を積み重ねてきたフェミニズムの腕の見せ所であり、主体をめぐる社会学理論に対する示唆をもたらしうる点であると考えられる。

メモ

・媒介主体に基づいた社会学理論を構想する際には、媒介主体における「融合」と「束縛」との違いはどう区別できるのかが論点の一つになる。また、媒介主体における「愛」と「融合」の関係（どのように同じで違うのか）についても要考察である。

文献

- Alaimo, Stacy & Hekman, Susan, 2008, *Material Feminisms*, Indiana University Press.
- Braidotti, Rosi, 2013, *The Posthuman,* Polity Press.(=2019, 門林岳史・大貫菜穂・篠木涼・唄邦弘・福田安佐子・増田展大・松谷容作訳, 『ポストヒューマン：新しい人文学に向けて』フィルムアート社.
- Butler, Judith, [1990]1999, Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity, Routledge. (=1999, 竹村和子訳『ジェンダートラブル：フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社. ）
- ————, 1998, “Merely Cultural”, New left review 227: 33-44..
- Benhabib, Seyla, [1991]1995, “Feminism and Postmodernism”, *Feminist Contentions : A Philosophical Exchange*, Routledge.
- ————, 1992, *Situating the Self : Gender, Community, and Postmodernism in Contemporary Ethics*, Polity.
- Coole, Diana, & Frost, Samantha, (ed.), 2010, *New Materialism: Ontology, Agency, and Politics*, Duke University Press.
- Dolphijn, Rick, & van der Tuin, Iris, 2012, *New Materialism: Interviews & Cartographies*, Open Humanities Press.
- Fraser, Nancy, 1997, “Heterosexism, Misrecognition, and Capitalism: A Response to Judith Butler”, *Queer Transexions of Race, Nation, and Gender*, Autumn-Winter, 52/53: 279-289.
- ————, 2000, “Rethinking recognition”, *New Left Review* 3(3):107-118.

- Fraser, Nancy, 1997, *Justice Interruptus: Critical Reflections on the "Postsocialist" Condition*, Routledge.（=2003, 仲正昌樹訳『中断された正義：「ポスト社会主義的」条件をめぐる批判的省察』御茶の水書房．）
- Foucault, Michel, 1996, *Les Mots et les Choses: Une archaologie des sciences humaines*, Paris. (= 1974,渡辺一民・佐々木明訳『言葉と物』新潮社.)
- ————, 1971, “Nietzsche, la généalogie, l‘histoire”, *Dits et écrits II*, Defert, D. et Ewald, F. (eds), Gallimard:131-156. (=［1994］1999, 伊藤晃訳 「ニーチェ、系譜学、歴史」,『ミシェル・フーコー思考集成IV』所収、筑摩書房．）
- 門林岳史, 2019, 「新しい唯物論」『現代思想43のキーワード』Vol. 47-6: 28-32.
- Haraway, Donna, 1991, *Simians, Cyborgs and Women: The Reinvention of Nature*, Routledge. (= [2000]2017, 高橋さきの訳『猿と女とサイボーグ:自然の再発明』青土社．）
- ————, 2008, “Otherworldly Conversations, Terran Topics, Local Terms”, Alaimo, Stacy & Hekman, Susan J. (ed.), 2008, *MATERIAL FEMINISMS*, Indiana University Press.
- ————, 2008, *When Species Meet*, Minnesota University Press.
- McRobbie, Angela, 1991, *Feminism and Youth Culture*, London: Macmillan Press.
- ————, 2009, *Aftermath of Feminism*, SAGE Publications, London.
- Nussbaum, Martha, [1991]1999, “The Professor of Parody”, *The New Republic*, 220(8):37-45.
- Pateman, Carole, 1988, *The Sexual Contract*, Stanford University Press.(=2017, 中村敏子訳,『社会契約と性契約――近代国家はいかに成立したのか』岩波書店.)
- van der Tuin, Iris, 2011, Review essay ‘New feminist materialisms’ , *Women's Studies International Forum*, 34: 271-277.
- Wollstonecraft, Mary, 1972, *A Vindication of the Rights of Woman*, (=1980, 白井堯子訳『女性の権利の擁護―政治および道徳問題の批判をこめて』 未來社.)